［翻訳］

「多値的」論理学の理論[1)]

ゴットハルト・ギュンター（Gotthard Günther, 1900-1984）、村上淳一 訳

ゴットハルト・ギュンターの二値編成複合（Polykontexturalität）の観念は、とりわけグローバル化への対応をめざすドイツの社会理論においていわば市民権を獲得するに至っている。しかし、ギュンターにおいてその前提となっている多値的論理学（Mehrwertlogik）に遡る考察は、ドイツの社会理論にもまだ多く見られないようである。ここに 1971 年に発表されたギュンターの論文 Theorie der “mehrwertigen” Logik の拙訳を試みるのは、その不足を補う研究資料を日本の学界に提供する意図による。この分野で全くの素人である訳者の無力をカヴァーして頂くために、畏友吉田育之君（物理学）に訳文の内容的検討をお願いしたところ、拙訳を補って余りある「コンメンタール」をご執筆頂き、訳稿に接続して掲載しうることになった。望外の喜びである。

アリストテレス［384-322 v. Chr.］が初めて部分的に体系化した古典的な形式論理学はもはや現代の学術を基礎づけるのに十分ではないということを 1971 年に論じようとするのは、まるで［ギリシャにおける知恵のシンボルであった］梟（ふくろう）をアテーナイに持ち込もうとするようなものである。そのことについては大方の意見が一致するであろうが、われわれの理論的思考の論理的基礎を拡大すべきか、どのような仕方で拡大すべきかが問われるや否や直ちに、意見は四分五裂の状態に陥ってしまう。アリストテレス論理学に対する重要な批判は、すでに中世において行われていた。［近世に入って］有名なのは［アリストテレス論理学の集成『オルガノン』の批判を試みた］フランシス・ベイコン［Francis Bacon, 1561-1626］の『新オルガノン』であるが、その少し後に、デカルト派

の学者ヨハネス・クラウベルク［Johannes Clauberg, 1622-1665］が古い論理学（logica vetus）と新しい論理学（logica nova）を区別している。古い論理学と新しい論理学、というこの些か単純な区別が、いま再登場しているのだ。新実証主義者のルードルフ・カルナプ［Rudolf Carnap, 1891-1970］が 30 年代の初めに「古い論理学と新しい論理学」と題する綱領論文を発表し（Erkenntnis, Bd.I/1 S.12-26）、この冴えない区別が――「新しい」論理学なるものの性格について皆目明らかにしていないにもかかわらず――やがて市民権のようなものを獲得することになった。たとえばベーラ・ユーホス［Béla Juhos, 1901-1971］が、すぐれた記号論理学［symbolische Logik］入門のなかで、この区別を用いている（Elemente der neuen Logik, Wien 1954）。これらの論者の著作を読めばすぐ判るのは、こういうことだ。アリストテレスの形式主義は不完全であり、部分的には不正確だとして批判され（これは正当である）、その形式主義を訂正し、拡張し、正確な数学化によって基礎づけることが、新しい論理学の課題だ、とされる。ロギスティク［Logistik. やはり記号論理学と訳される］とも称するこの現代的専門領域は、何よりも、「日常言語への拘束」から解放されようとする努力によって特徴づけられる（A. Menne, Logik und Existenz, Meisenheim 1954）。論理学のこうした現代的方向にとって特徴的なのは、あらゆる認識論的・心理学的顧慮からの解放を求めるだけではなく（これも正当である）、われわれの思考のプラトン［427-347 v. Ch.］とアリストテレスによって与えられた存在論（オントロギー）的基礎を無視するということである（これは不当である）。哲学的存在論は形而上学であるとして――カルナプが上記の論文で言うように――新しい論理学によって明示的に排除されるのだ。「理論としての哲学、すなわち、科学の諸命題と並ぶ独自の諸命題の体系としての哲学は、ない」（S.26）という理由で。

このように目をつぶること［Vogel-Strauß-Politik］によって「超越的（トランスツエンデント）なもの」を見ないで済ませるという、反形而上学に徹した態度は、論理学の発展にとってまさに破滅的な結果をもたらした。こうした態度をとる者が全く忘れていることだが、プラトンにとってもアリストテレスにとっ

ても、また、それに続いて少なくともライプニツ［Leibniz, 1646-1716］に至る偉大な伝統にとっても、形式論理学は形式化された存在論に他ならない。同じことは、とりわけストア派の論理学についても当てはまる。しかし他方において、現代の記号論理学が「古典古代の形式論理学の高次の発展段階」（J. Łukasiewicz, Transaktionen des Ⅷ. Internationalen Philosophiekongresses in Prag 1934, S.75）に他ならないとするなら、いわゆる新しい論理学がその原型であるアリストテレス的形式主義という形で――たいていは論者によって気づかれることなく――古い存在論的前提を引きずっているのは避けられない結果なのだ。

古典的な存在論を無視しさえすれば、そして思考の「経験的所与」との皮相な遭遇から自分なりの真理基準を導き出しさえすれば、古典的存在論を無効にし、哲学的に破棄できると信じるのは素朴すぎることだ。こうした態度がもたらした破滅的な結果は、論理的意識から存在論を締め出すことによって、必要不可欠の存在論批判も、もろもろの新しい基本原理による存在論の拡大も、全く不可能になってしまったということである。分析すべき事柄を論理学の領域から締め出すばかりでなく自身の理論的意識からも締め出し、それでも形而上学的問題が浮上するところではそれを「仮象問題」（カルナプ）として軽く片付けてしまうならば、ものごとをまじめに、そして積極的に分析することなど、できはしない。こうした事情の下で、実証主義的（ポジテイヴイステイツシユ）ないし新実証主義的（ネオポジテイヴイステイツシユ）な志向をもつ現代論理学が哲学的意識の革新にほとんど寄与しえず、とくにいわゆる社会的（ゾツイアール）ないし人文学的（ガイステスヴイツセンシヤフトリヒ）な諸問題に対して惨めなほどの無力を曝すのは、不思議ではない。なぜなら、そのような現代論理学にとって、歴史の問題や客観精神［多様な主観性を前提とする何らかの客観性］の問題は、およそ存在しないからである。

こうした問題を捉える一つの可能性は［1971年から振り返って］すでに50年前にあったのに、人々はそれを看過してしまった。それは、［二値的論理学を超える］多値的論理学（メーアヴエーアテイゲ・ローギク）が生まれたときのことであって、若干の早すぎる試みを別として［20世紀］20年代の初めをその誕生の時と見ることができる。アメリカ人のエイミール・ポゥスト［Emil Post,

1897-1954］が伝統的な二値原理を破る作品（Introduction to a General Theory of Elementary Propositions, Amer. Journ. Math. 43, 1921, S.173-185）を発表したのが、その時期であった。ほぼ時を同じくして、ウカシエヴィッチ［Łukasiewicz, 1878-1956］の指導するポーランドの論理学者グループが、多値的な論理学体系に関するまじめな研究を開始した。

そのさい、ポーランドの論理学者たちは、アリストテレスの『オルガノン』の純正な存在論的問題から出発した。すなわち、アリストテレスは［オルガノンの一部である］「解釈について」において、排中律は過去についても未来についても妥当（ゲルテン）するが過去にのみ適用可能（アンヴェンドバール）だ、としている。そこから二つの結論が出てくる。すなわち、アリストテレスの注記は、第一に、古典的な存在論は時間の問題を持ち込まれるや否や見直しを要する、という趣旨を含み、第二に、未来についてのある種の言明は原理的に様相（モダリテート）言明または確率（ヴァールシャインリヒカイト）言明であるしかない、という結論を強いるものである。

多値的論理学の最初の展開についてきわめて特徴的なのは、それに関わった論理学者たちが客観性という存在論的問題を完全に無視して、自我という一個の中心に関わる諸言明として構成された一つの思考理論としての論理学の、主観主義的側面だけに注意を集中したということである。確率［どの程度〈ありそうだ〉と思えるか］は客観的現実の範疇（カテゴリー）ではなく主体（ズブイエクト）に関係する範疇であるが、主体は、その理論的判断能力が問われる限り、世界に対して原理的に不確実な状態にある。様相［どんな条件の下で言えることか］という範疇についても、同様である。ポーランドの論理学者たちは、こうした態度の直接的な結果として、伝統的な思考理論の古典的な存在論的枠組みを全く無傷のままに残しながら、原理的に二値的（ツヴァイヴェーアテイヒ）な体系の枠内で何らかの付加的な値（あたい）を定着させようと試みた。ウカシエヴィッチはこのテーマについての諸論文のなかで、新しいもろもろの値の論理的な場は真（ヴァール）と偽（ファルシュ）という二つの極端値（グレンツヴェーアト）の「間に」求められねばならないと明言している。その結果、極端値を 0 と 1 とするならば、三値的な体系は

0……1/2……1

という図式に従うことになる。五値的な体系に移ると、この図式は拡張されて

0……1/4……1/2……3/4……1

になる。

確率の差異、様相の差異をもっと細かくしようとすればするほど、この図式がいくらでも付加的な値によって充たされていくことは、明らかである。他方、C. I. ルーイス［Lewis, 1883-1964］の多値的システムをさらに展開したオスカル・ベッカー［Oskar Becker, 1898-1982］は、そのような計算は純粋な数学に比定されるべきではなく理論物理学に比定されるべきだという、正当なコメントを加えている。「なるほど理論物理学者は数学的思考手段（公式など）を用いるが、かれの目指すところは〈純粋〉で〈自由〉な数学者が樹立するような係留されない思考構造ではなく、かれの観察から生ずる物理的経験という事実関係（タートベシュタント）……についての説明（エアクレールング）なのだ。この物理的経験から類推されるのが、論理的事実関係、論理的経験といったものなのである」（Einführung in die Logistik, Meisenheim 1951, S.13）。

しかしそれは、こういうことでもある。そのような論理学は思考主体の経験的（エンピーリッシュ）な経験容量（エアフアールングスカパツイテート）に依存するものだから、さまざまの形式論に立脚するところが大きいとしてももはや純形式的な体系ではない。換言すれば、二値性（ツヴアイヴエーアテイヒカイト）に徹する古典的な形式主義は、そのような拡張によって少しも修正されないのである。つまり、そうした形式主義が内包する存在論には手がつけられないままなのだ。新しい形式主義を以て古い形式主義に代えるには、まずもって、新しい存在論的現実像をもたなければならない。そうして初めて、そのような現実像が形式化を得ることによって自動的に、二次的な派生物として新しい論理学をもたらすのであって、逆の道をとることは不可能である。

エイミール・ポウストや論理学のポーランド学派やC. I. ルーイスやH. ライヒェンバハ［Reichenbach, 1878-1956］をはじめとする学者たちによって展開された多値性論（メーアヴエーアテイヒカイト）は、真（ヴアール）と偽（フアルシュ）という二つの値（あたい）に何らかの新しい値を付け加えるものではない。この種の多値性論は、

二値性論に冷水を浴びせるにとどめ、肯定と否定のきびしい対立を一方から他方への段階的な移行によって置き換えるだけのことである。われわれは、そのようなタイプの多値性論を古典的の枠内にとどまるものとみなし、論理学の普遍的な理論においてまともな席を占めはするが哲学的にはあまり重視されないものだということを、はっきりさせておきたい。

他方で確認しなければならないのは、このタイプの多値性論が――過剰な期待をかけられて力に余る諸問題を課されたために――さまざまの期待をひどく裏切ったということである。すでに 50 年代に、I. M. ボヘィンスキ［Bochénski, 1902-1995］が、「異端的な」（多値的）論理学についてこう記している。「これらの体系の性格はきわめて問題である。それらに登場するある種の機能子［機能を促すもの］はいかなる論理的解釈も受け付けないように思えるし、一旦はこれらの体系を熱烈に歓迎した論理学の専門家たちも、いまではほとんど、それをきわめて懐疑的に見ている」（Der sowjet-russische dialektische Materialismus, S.132. 引用は 1956 年の第 2 版による）。

それ以来、論理学入門として書かれた手引書においては、多値的論理学は――「そういうものもあるにはある」として――せいぜい短い註で言及されるだけで、すぐに本来の筋書きに戻って昔ながらの古典的論理学を現代的に拡張し、より精密化した言い換えに移るのが、普通になっている。一例を挙げておこう。ヴォルフガング・ゼーゲトのよくできた説明（Wolfgang Segeth, Elementare Logik, Berlin 1970, S.39）によると、「相対的に［＝或る程度］真だったり偽だったりする言明と、それらの関係を、多値的論理学において観察したくなるのは尤もなことだ。もとより、そのような論理学もすでに存在する。そこでは一つの言明が［あれかこれかの二者択一ではなく］三つまたはもっと多い値のうちの一つの値を採りうるとされ、そのような論理学を物理学や工学に適用しようという試みもある。しかし、二つの絶対的真理値［真か偽か］の他に相対的な真理値を物理学や工学で用いる試みは、いままでのところまだ満足すべき成果を挙げていない」。

この文を引用したのは、それが、多値性の問題に対するいまなお支配的な態度を代表するものだからである。多値的システムもやはり思考する主体の活動、すなわち概念言語（言明）によって自己を表明する活動の理論だということが、自明視されているのだ。そして、付加された［複数の］値（あたい）が〈真と偽〉という両極端値との関係で相対値であることが、いままでどおり自明の前提とされているのだ。換言すれば、付加された［複数の］値は客観性との直接の関係をもたず、直接的には、〈自照する主体〉の認識論（エピステモローギッシュ）的な状態との関係をもつにすぎない。存在（ザイン）の客観性との関係で意味論（ゼマンテイッシュ）的な重要性をもつのは、二つの絶対値［真と偽］だけである。

これに対して確認しておかなければならないのは、なお全く別の意味で、すなわち古典的ではなく古典超越（トランスクラシッシュ）的な意味で、多値性について語りうるということである。正統的 - 古典的な多値性の理論は、客体に対する主体の絶対的優位という、抽象的で観念論的な旧来の理論を内在させていた。ヘーゲル［1770-1831］の客観精神の理論が投げかけた問題も、この旧来の理論にとっては馬耳東風であった。伝統理論にとって、諸価値の源泉は自他について自照（リフレクト）する主観性であり、その結果、真と偽という二つの根源的価値が――客観的に意味論的な意義をもつ［それらがさまざまの主観を結びつける上で意味のある概念として役立つ］かぎりで――世界を超えた彼岸（イエーンザイツ）に投影され、その彼岸においてプラトン的な「実在性（ヴエーゼンハイテン）」という統合的な契機を形成した。だがその国は、プラトンによれば第三、第四等々の値（あたい）が入り込むことができないように創られていたのだ。

それとは別種の、古典超越的な多値論の起源を求めても、哲学的にはプラトンではなくヘーゲルにまでしか遡れない、それも、ヘーゲル哲学の観念論的伝統との断絶を含む側面までしか遡れないということは、きわめて注目すべきである。古典的伝統においては、［真・偽という］絶対的な値（あたい）は彼岸の反照であった。そうした絶対的な値と此岸（デイースザイツ）との距離は、それが形式的でしかないという事実に示されている。これに対して、ヘーゲルの弁証法的論理については、レーニンの的確な

指摘がある。「論理的な形式と法則が空虚な包装ではなく客観的世界の反映であることを、ヘーゲルは真に証明した。証明したというよりは、天才的に見て取った」(WW, Berlin, 1970, 38, S.170)。しかし、端緒にあった二つの古典的な値［真・偽］が客観世界の反映だったとするなら、二値性の原理を外れるその余のもろもろの値が同様に対象世界の性質を示すべきだということになぜならないのか、理解できない。そして、それらの値を主体の判断の不確かさの表現と見なければならない理由も、理解できない。その主体は、自分では正確に決めることのできない未来に対しているというのに。もう一度強調しておくが、多値性についてのそのような解釈は、排中律及び過去と未来の論理的関係についてのアリストテレスの記述に基づいて可能なのである。しかし、それを手がかりとする解釈だけが可能だというわけではない。

過去と未来の間には論理的な断絶がある。それは、「排中律」は過去・未来の両領域に妥当［gelten］するが、その一方においてのみ適用可能［anwendbar］だ、とされることに示される。この論理的 - 時制的な断絶は、此岸と彼岸の間、または、現実世界の時間と超現実世界の永遠との間の形而上学的断絶の、現実世界における隠喩なのだ。ところで、ヘーゲル哲学が古いものを止揚したということは、根絶ばかりでなく維持をも、そして高度化と明澄化（フエアクレールング）［Verklärung は通常は十字架上のイエスの変容］さえも意味するということを、忘れてはなるまい。最後に挙げた変化について語るつもりはないが、ヘーゲル哲学が、此岸と彼岸の基本的な区切りが消滅し根絶されるばかりでなく存続し保存されるという意味で止揚されたと言う場合、それが何を意味するかについては説明しておこう。古典的な哲学にとって絶対的存在とは、万物の基礎にあって到達しえない彼岸に隠れている神であって、此岸としての世界は固有の存在をもたず、派生的・個別的に在るものにすぎない。経験的 - 客観的に在るもの（ザイエンデス）と、それを基礎づける絶対的・超世界的な存在（ザイン）との間には、思考によって越えることのできない深淵がある。「彼岸」が何であるかは、神秘として意識に示されるしかない。

だが、ヘーゲル哲学は、〈物自体〉を自照（レフレクシオーン）において解消することに

より、絶対的なるものを完全に此岸に取り込んだ。彼岸がこうして内容空虚になったために、残されたのは解消過程そのもの、すなわち思考が越えることのできない境界、という観念だけになる。「即自性（アン・ジッヒ）とは、」とヘーゲルは言う。「死んだ頭、他者の死せる抽象、空虚にして規定されざる彼岸、にすぎない」（WW, ed. Glockner, IXX, S.606）。

その意味で、内容ある領域としての彼岸は根絶された。しかし他方において、それは、此岸自体に仕切りを設ける自照過程（レフレクシオーンスプロッセス）の定めとして、守られ、保たれている。なぜなら、ヘーゲルが上記の引用に続けて言うように、思考は「みずからの仕切りを設けた瞬間に、それを廃さない」ことを欲するからである。

これはきわめて曖昧な印象を与えるが、そこには正確な論理的意味が潜んでいるように思われる。要約して繰り返そう。まず、彼岸は――自照によってどんな内容も取り除かれたために根絶されたという意味で――止揚（アウフヘーベン）されている。しかし、次に、彼岸は――いまや自照が此岸において主観性として仕切りを設けることによって――保たれ、守られている。その仕切りは、絶対的な知の領域である彼岸から此岸を分かつ論理的な断絶と全く同様に、乗り越えられないものである。

こうした思考を形式論理学の無味乾燥な講壇用語に翻訳しようと試みるなら、一つの新しい概念を導入するのが良いだろう。その概念を、論理的な二値編成（logische Kontextur）と名付けておきたい。それは、次のようなものとして理解されなければならない。閉じられた二値編成（コンテクストウーア）としての古典的論理学は、同一律［irreflexive Identität 再考の余地なき同一性］と矛盾律［verbotener Widerspruch 矛盾の禁止］と排中律［ausgeschlossenes Drittes 第三項の排除］によって規定される厳格に二値的な体系である。その体系をわれわれが意図する意味での二値編成にするのは、「排中律」に付加されなければならない一つの補足的公準なのだ。すなわち、われわれは、肯定と否定の選択肢はきわめて普遍的でなければならず、あれこれと考えをめぐらす自照においてその選択肢がより高次の積極・消極の決定観点の下位に置かれることはありえないものとしている。一例として、われわれが被告人は有罪だとか無罪だとか言う場合、そこで念頭

に置かれている「排中律」は形式どおりの法律論による刑法的責任という高次の決定観点に服しており、そういう制限の枠内での排中律にとどまる。そこでわれわれが、被告人は責任能力がないではないかという異論を唱えるならば、われわれは当初の決定観点の外に出たことになる。そのさい、医学的ないし精神医学的な範疇が一役買うことになるからだ。そこで、破れたばかりの排中律よりも広い論理的守備範囲をもつ新たな「排中律」を立てようとするならば、［法律の立場ばかりでなく精神医学の立場をも含む］もっと高次の決定観点が必要になる。そのような意味で、われわれは、絶えず普遍性において上位に立つ「排中律」について語ることができる。どれもが最終的なものではありえず、さらに強力な普遍性という決定観点に競り負けることを免れない。確認しておこう。二値的論理は、それを完結させる排中律がもっと高次の実定的決定観点によって上位に立たれることがもはやないほど普遍的になって初めて、純粋に形式的な二値編成を樹立するのである。ということはつまり、形式性の［もっと強力な普遍性に競り負けるという］この後退は、後退の中味に関しては際限がないということだ。しかし、論理的な構造物としては、そうした体系は形式的に完結している。それは、乗り越えられることのない柵をめぐらした構造をもつ。なぜなら、「排中律」のさまざまの可能な定式化のヒエラルヒーは体系の構造の性質を変えるものではなく、「排中律」を内在させる部分的な否定を細かく差異化するだけで論理的に処理できる材料の内容領域を拡大できるからである。もう一度繰り返しておけば、われわれの言う二値編成（コンテクストウーア）とは、二値性によって構造の柵をめぐらしてはいるが、無制限の容量と受容能力をもつ二値的構造領域なのだ。

しかし、それは――出発点としたヘーゲルと、ヘーゲル論理学における彼岸の止揚（アウフヘーブング）に立ち返るならば――人間の意識が彼岸に投影したすべての具体的内容が「此岸の」二値編成において再吸収されうるということを意味する。二値編成中に再吸収できないのは、［具体的内容ではなくて］この構造的な柵という観念自体である。それは、自照する意識と人間の思考に伴い続けるものであるが、いまや全く新しい意義と全く別の

機能をもつことになるのだ。その元来の機能は、合理的なもの、対象としてとらえられるものを、永遠の神秘から、そして人間が死と救霊によってしか立ち入れなかったものから、区別することにあった。しかし、その同じ柵の新しい役割が、「救われざるもの」にとっては相変わらず乗り越えられないものであるにもかかわらず――すなわち、〈個々別々の主観性〉と〈物理的身体に閉じこめられた意識〉を伴いながらも――古典超越的な多値性（メーアヴエーアテイヒカイト）の理論による媒介が明らかにする意義を得ることになる。

古典的伝統においては、この柵は、宗教的経験においてのみ予感される彼岸から此岸全体を分かつ、一回的なものであった。此岸的・経験的な世界自身のなかには、そのような柵はなかった。つまり、われわれに対象として与えられている経験的な宇宙は、論理学者の観点からすれば二値性に徹した普遍的な一体を成しており、その合理的な版図には理論的思考にとって原理的に乗り越えられない柵はなかった。

さて、この普遍的な一体性が、「排中律」の絶対的・形式的な妥当によって論理的に構成されるべきだということになる。そして、被告人が有罪か無罪か、責任能力があるかないか、（もっと挙げてみれば）金髪であるかないかといった上記の例において、それぞれの［二つの］選択肢が千差万別の観点から構成されているとしても、刑法や臨床心理学や生理学によって構成されたそれらの観点が――「形而上学的に」理解すれば――考えられうるその他一切の観点と共に統一的な二値的体系にまとめられるであろうということ、しかもそのさい、最上位の観点が存在そのもの（ザイン・ユーバーハウプト）に帰するであろうということが、まさしく前提とされているのである。換言すれば、存在そのものは古典的な論理学の立場から見れば「単一・二値編成的（モノコンテクトウラール）」な構造をもち、その諸性質が古典的な二値的形式論理学によって、巧みに記述されているのだ。

さて、これに第三の値（あたい）を持ち込むと、また新たな選択肢と向き合うことになる。その値を古典的な二値編成のなかに登場させることもできる。そうすれば、すでに記述した多値性の観念、すなわち確率論理または様相論理としての多値性になるわけだ。しかし、その第三の値が、古典的

な二値編成の「外に」位置づけられるに足る合理的な重みをもつと認めることも、同様に可能である。もとより、後者のように考えることは、まだ伝統的な存在形而上学の強い示唆に服する古典志向の意識にとっては、実行不能である。なぜなら、古典的論理学が存在そのものを取り上げるならば、それは「すべて」を含んでいるのだから、「すべて」の彼方にあるものを考えようとすることは全く無意味なのだ。しかし、第三、第四、第五等々の値（あたい）が二値編成内部の機能をもつ［程度の違いとして二つの値の中間のどこかに位置づけられる］のではなく「二値編成を超える」機能をもつような論理学という考えには意味がある……われわれが生きる宇宙は二値的論理学によって記述できる統一的な二値編成を示しているという古典的・形而上学的テーゼを放棄するならば。むろん、哲学は古来、二値編成を超える現象をつねに目のあたりにしてきた。［二値編成の下で真／偽、正／邪を決める］客観に徹するゆえに自照なき世界における、主観性や「生（レーベン）」の問題のことである。生ける「魂（ゼーレ）」だなどとよばれた鬼才（フエノメーン）について、あれは別の世界から来た市民だといった類の説明により切り抜けたという話は、［ソクラテスについてのプラトンの著作］『パイドン』に明確に書かれている。また、キリスト教の伝統も、「われわれは此処を永遠の都とするのではなく、未来の都を探すのだ」（ヘブライ人への手紙 13:14）という言葉によって、同じ趣旨を確認している。［〈はじめにロゴスがあった。ロゴスは神とともにあり、ロゴスは神であった〉というヨハネによる福音書 1:1 によって］地上の実りを生むために別の世界から神の種がもたらされたというロゴス論も、同様である。

これが含意しているのは、生という現象は非合理的で超越的な神秘であり、その解決について悟性は永久に絶望的たらざるをえないということだ。計算しながら合理的なカテゴリーによって動く才気（ガイスト）は、永久に「魂の敵対者」（L. Klages［1872-1956］）であり続ける。その種の世界観が意識的または無意識的に前提とされるかぎり、第三の値（あたい）とそれに続くすべての値を古典的伝統の二値編成の外に置くような多値的論理学は全く不条理である。そうなると、それらの値が指定するかもしれないものすべてが、超越的なるものの此岸への神秘的な侵入に他ならない、というこ

とになってしまうから。そうなった暁には、その種の多値的論理学は、合理性を超えるものを論理的形式で、つまり合理的に叙述するという、矛盾だらけの課題を負うことになるであろう。

こうした世界観に基づくなら、付加されたさまざまの値が二値編成内部に登場しないような多値的論理学は、言及するに足る意味をもたないものとされる。しかし、此岸と彼岸、時間と永遠を別々に考えるような離接二値性（デイスコンテクストゥアリテート）の理念をわれわれが生きるこの宇宙に転用すると、事態は一変する。われわれの「馴染んだ」この宇宙が単一・二値編成的（モノ・コンテクストゥラール）だというのは、むろん古典的存在論の必然的な結果としてもたらされた、何の証明もないドグマなのだ。しかし、一旦このドグマを棄てて、あるがままの世界を囚われずに見るならば、地上のものならぬ彼岸の神話的な構成に助けを求めずとも、自分の意識空間に閉じ込められた主体の二値的・合理的な思考が二値編成という乗り越えることのできない柵に突き当たることを確認せざるをえない。この経験的な宇宙自体、多・二値編成的（ポリュ・コンテクストゥラール）であり、われわれは人生において毎日この現象と出会いながらもそれに関する経験の論理的な結果を意識するには至らないのである。こうして、われわれ自身の意識空間が自己閉鎖的な二値編成として示される。同じことが、客観的な対象世界において多数の〈きみ（ドゥー）〉たちとして出会う他の主体たちの意識空間にも当てはまる。ところで、この客観世界は、そこに住まう〈きみ〉の主観性を別とすれば、「自照（レフレクシオーン）なき存在」（ヘーゲル）であり、それがまた独自の二値編成を成しているのである。これらの二値編成はいずれも、同一の普遍的な「排中律」に服する。われわれはその排中律に、われわれ自身の意識空間において出会い、われわれ自身の自照機能を形式化したものとしての二値的論理学の理論を展開したのだ。すべての〈きみ〉の主観性は、同じ二値編成ではあってもわれわれのものとは区別された二値編成をもつので、等しく通用する論理学を展開しなければならない。一箇の普遍的な主体を想定することによって、思考が別々の主観性において一致すること、対象との一致において一致することを説明する必要は、ないのである。

多数の自己閉鎖的な二値編成があるとするなら（ライプニツによれば、

単子（モナド）には窓がない）、個々の二値編成がより大きな団体や「二値編成を超えた」グループにまとまれないものか、という問いが直ちに出てくる。社会的団体があるという事実、そして人間と万有の歴史におけるその他の事実関係に照らして、この問いには肯定的に答えなければならない。

したがって、さまざまの二値的な「基本的二値編成」（Elementar-Kontexturen）と、より複雑な構造の諸形象を、区別する必要がある。後者はさまざまの基本的二値編成の複合であって、これを「二値編成複合」（Verbund-Kontexturen）と名付けることにしたい［直訳すれば〈複合二値編成〉であるが、〈複数の二値編成から成る複合〉という内容を明確にするために〈二値編成複合〉という訳語を採る。やはりギュンターが用いて一般化した Polykontexturalität も、Verbund-Kontexturen の言い換えである］。すでに示唆したように、われわれ自身の意識空間と〈きみ〉の意識空間は、区別された二つの基本的二値編成を示している。自照なき客観性の領域が、第三の基本的二値編成である。これらの領域のそれぞれで、古典的な論理学が二値編成内部で妥当（ダルチン）する。それぞれの――客体の場合は物理的出来事、主体の場合は意識の機能という形をとる――二値編成内部の作動（オペラツイオーン）は、それが生じた二値編成領域のきびしい枠内で展開される。主観的思考を客体に移植することはできない。それができると信じるのは、魔術である。そして、私が「私の」思考展開を〈きみ〉の意識空間で進めることはできないと知りながら、なおかつ〈その思考展開は私のものだ〉と主張しているのだということは、断るまでもない。

だが、こうして三つの基本的二値編成、〈わたし〉と〈きみ〉と〈それ〉の機能的自律を強調しておけば、こう確認することに支障はない。すなわち、二つの主体が共通の客体について語る場合の共通性のゆえに二値編成複合と称せざるをえないような、そして、二値的論理学が示せるよりも遙かに高度の論理的複雑性を伴うような状況が、生まれるのだ。

そのような状況を微細な論理的分岐を含めて記述しようとするなら、きわめて多数の値（あたい）をもつ論理体系が必要になる。だがここでは、二値編成複合の一般原理を説明するために、それが成り立つごく簡単なケースを挙げるにとどめよう。

しかし、まず、これまで述べたことを要約しておこう。多値的論理学という語は、二つの意味で用いられることを知らなければならない。

まず、古典的な二値性に付加された値（あたい）が、そもそも肯定そのものか否定そのものかという伝統的な対置の幅のなかに位置づけられる。われわれはこの多値性を二値編成内部的と呼んだのであって、それは、古典的な形而上学とも、此岸の世界と超越的な彼岸の区別とも、完全に一致しうるものである。この理解は、合理的な手段では原理的に解消できない絶対的な非合理性があるという見方を内在させている。それと区別されるのが「古典超越的な」論理学の意味における多値性であって、そこでは、さまざまの付加的な値の論理的な場は二値的体系の「外に」求められる。いまや、さまざまの新しい値は絶対的な真と絶対的な偽の差異を相対化するために役立つのではなく、新しい二値的な二値編成（コンテクストウーア）を古典的な元来の二値編成に付加するために役立つのである。どのようにしてか、ということは、次の表によって示すことにしよう。われわれは、いま普通に行われているように、一つの多値的体系のなかのさまざまの論理的な値を自然数によって次のような仕方で示すことにする。すなわち、1が古典的な肯定性の元来の役割を引き受け、それに続くすべての数が累進的な否定段階を示す。そうすると、2という数に古典的な否定の役割を与えうることになる。重要なのは、2が古典的な否定領域の全体を示し、したがって、それに続くもろもろの数が部分的な否定を示すのではなく、古典的二値性の全領域の「彼岸」にある数々の新しい「否定的な機能子」を示す、ということである。さらに、われわれは、否定体系が計算論的に見てまさしく、任意の数nだけある値のすべての置換を総括して示すものと定める。この解釈は、簡単な古典的否定の第Ⅰ表に該当する。

第Ⅰ表

p	Np
1	2
2	1

これは、任意の数の値（あたい）に自由に拡張できる。たとえば三つの値について、第Ⅱ表を見よ。

第Ⅱ表

p	N1p	N2p	N2.1p	N1.2p	N2.1.2p 1.2.1
1	2	1	2	3	3
2	1	3	3	1	2
3	3	2	1	2	1

このように、第Ⅱ表には古典的な否定例（第Ⅰ表）が再出している。われわれは、古典的な論理学が立脚する肯定と否定そのものとの基本的な互換性を、第Ⅱ表において二重罫線により付加的否定のケースから区別した。第Ⅱ表は、二値編成複合を基礎づける最も単純なケースにおける否定構造を示す。二つの表に出てくる p は、通常そうであるように、値（あたい）の変更を伴う変数項である。オペレーター N1p が値の 1 と 2 の互換性を示すのに対して、N2p は値の 2 と 3 について同様の役割を果たす。その他 1, 2, 3 の置換は、第二表が示すように、二つの基本的オペレーターのそれに適合する組み合わせによって得られる。

ここで次のことが注目される。或る一つの基本的二値編成を記述するには、二つの値が必要だから、単値的な存在論は二値的論理によって自照しなければならない。ところで二値編成複合の最も単純なケースは二つの二値的体系から成り立つと説かれるなら、それは勘違いだということになる。古典超越的な二値論によってわれわれが知りうる最も始原的な二値編成複合の形式は、第Ⅱ表が示すように三つの二値編成体系から成るのであって、1<—>2 及び 2<—>3 という互換性に加えて、いまや 1<—>3 という「媒介された」互換性が登場するのだから。

基本的二値編成が二つの任意の値の対称的な互換性によって構成されている以上、一つの二値編成複合の最も単純な形は三つの基本的二値編成から成るということになる。こう言うこともできる。二値編成複合とは、存在論的にとらえられる「あちこちの場所（ヴェルトシュテレン）」に古典的論理学があま

り相互の関連なしに何度も登場するものだ、と。

確率論としての多値的論理学と、二値編成複合の理論としての多値的論理学との違いをやや詳しく説明するために、二値的システムと三値的システムそれぞれにおける接続（K）の論理的機能子を比較することにしよう。

第Ⅲ表

p	q	pKq
1	1	1
2	1	2
1	2	2
2	2	2

第Ⅲ表においては、二つの変数pとqの助けを借りて、古典的論理学にとっての接続（コンユンクツイオーン）（K=und）の値（あたい）の変移が示されている。この変移の規則は、Kが機能子として、両変数が値の選択のために「提供する」そのときどきの「最高値」をとる、というものである。値の選択のこの原理を三値的な表に当てはめてみると、解釈によって二つの可能性が生ずる。

第Ⅳ表

p	q	pKwq	pKKKq	pK1<—>2q	pK2<—>3q	pK1<—>3q
1	1	W	1	1		1
2	1	?	2	2		
3	1	F	3			3
1	2	?	2	2		
2	2	?	2	2	2	
3	2	F	3		3	
1	3	F	3			3
2	3	F	3		3	
3	3	F	3		3	3

この第Ⅳ表[2)]は、接続的構造（最高値の選択）を、二つの解釈として示している。第一の解釈

pKwq［K は Konjunktion（接続）の K, w は Wahrscheinlichkeit（確率）の w］では、値として示されるものが確率の機能子になっている。つまり、値の変移が「真（W=wahr）」-［値 3 という極端値に至らない〈確率の問題〉としての］「不定 (?)」-［値 3 を顧慮するがゆえに二値性の枠外に出てしまう］「偽（F=falsch)」で生ずる。機能子（K）についての第二の解釈

pKKKq

は、この最初の解釈から縦の二重罫線で分けられている。こちらの解釈によれば、値（あたい）2 はもはや「不定」という意味をもちえず、「偽」を意味することになる（依然として第Ⅲ表の、オリジナルの古典的［二値的］体系によっていることを前提とする)。しかし、第Ⅳ表において確率の機能が一つの列のなかで値（あたい）変移を形成することにあるのは、古典的な二値的体系が「真（ヴァール）」と「偽（ファルシュ）」の両極端値（グレンツヴェーアト）間に程度の段階［不定］があることを認めるからである。これに対して、pKKKq はもはや同様の意味で一列のなかでの機能変移と見ることができないものなのだ。われわれはいまや、［最高値を選択する］機能を、三列の二値的体系が［横並びに］連結している状態に係らせる。そのさい、これらの二値的体系のそれぞれが、（他の二値的体系とは無関係に）各自の内部構造において

pKwq

の機能におけると同様、またしても中間的な値を現わすように「軟化する」のは、われわれの関知するところではない。そのような随伴的ケースについて述べるには技術的な手段が必要だが、この問題についてはそれが欠けているのだから。ただし、次のことだけは言っておこう。確率論理ないし様相論理としての、三値的体系の解釈は、第Ⅳ表で縦に並ぶ九つの枠（シュテレ）から成る、全部で［3^9=］19683 通りもの値（あたい）配列のすべてについて形式論理学的な［二値的な］解釈を許すものではない。しかし、そうした値配列（ヴェーアトフォルゲ）は、古典的論理学による［pK1<—>2q, pK2<—>3q, pK1<—>3q という］三列の枠値体系（シュテレンヴェーアトジュステーム）として解釈するならばいずれも、やはり形式論理学的［二値的］に解することができるのである。だが、そのように解しうるためには、われわれは多値性が古典超越的な論理学の表面的現象にすぎないこと、その本来の核心はもっと深い構造領域に求

めなければならないということを、直視しなければならない。こうした本来の核心に至るために、次の第V表では、可能な限りでの二値的・二分法的な機能子を集めた。そのさい、今後は一貫してW及びFという記号を用いず、つねに1と2によることとする。得られるのは、

第V表

1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	2	2	2	2
1	1	2	2	1	1	2	2
1	2	1	2	1	2	1	2
2	2	2	2	2	2	2	2
2	2	2	2	1	1	1	1
2	2	1	1	2	2	1	1
2	1	2	1	2	1	2	1
a	a	a	a	a	a	a	a
a	a	a	a	b	b	b	b
a	a	b	b	a	a	b	b
a	b	a	b	a	b	a	b

の、一つまたは二つの値から成る16の四枠（シュテレ）から成る値（あたい）配列である。それぞれが八つに再区分されているが、それは、下位のグループがどんな場合にも上位グループの値配列をその都度否認していることを示すためである。この定めから直ちに明らかになるように、否定によって値配列の構造が変えられることは決してない。変わるのは、構造の自己明示を媒介する個々の値だけである。したがって、われわれは、水平に引いた三重線より下に、それに対応する構造的配置（コンフイグラツイオーン）をaとbによって示しておいた。aとbは、第V表の、いずれかが枠を占める値と解されなければならない。以下においては、この構造的配置［たとえばaabb］を小言明単位（モルフオグラム）と称することにしたい［これに対してaやbのような最小単位はケノグラムと称する］。そして、古典論理学の、二値的真理関数表に載る16の可能な値配列が八つの小言明単位に属することを、確認しておくことにしよう。

とはいえ、小言明単位は、論理学が二値的に展開されるか多値的に展開されるかという問題とは全く無関係なので、第Ⅴ表で示された八つの小言明単位は四つの枠によって実現されるすべての可能な構造からの多かれ少なかれ恣意的な切り抜きにすぎないということを、確認しておかなければならない。そこで、四つの枠により媒介されて示された、そもそも可能とされるさまざまの構造的配置は、次のような形をとる。

第Ⅵ表

$(1)_4$	$(2)_4$	$(3)_4$	$(4)_4$	$(5)_4$	$(6)_4$	$(7)_4$	$(8)_4$	$(9)_4$	$(10)_4$	$(11)_4$	$(12)_4$	$(13)_4$	$(14)_4$	$(15)_4$
a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a
a	a	a	a	a	b	b	b	b	b	b	b	b	b	b
a	a	b	b	b	a	a	a	b	b	b	c	c	c	c
a	b	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	d

一見して判るように、括弧つきの数字で示した数は 15 のそうした構造的配置を指している。それぞれに付された次数（この表ではいずれも 4）は、それぞれの構造的配置がいずれも四枠の小言明単位であることを示している。構造を示すこの方法が小言明単位をどれだけ並べても適用されることは、言うまでもない。括弧つきの数字による小言明単位の順序は恣意的なものではなく、多値的な体系における否定的オペレーターの構成に対応している。それに立ち入ることは省略するとして、われわれがここで確認したいのは次のことである。すなわち、第Ⅴ表にまだ含まれていなかった［c を含む］小言明単位は、まとまったグループとして八つの［a と b だけから成る］古典的な小言明単位に加わったものではなく、八つの小言明単位から成る表の改訂を成就しているのだ。だから、たとえば小言明単位$(5)_4$はすでに古典超越的な小言明単位である。それに値（あたい）を入れようとすれば三値的な体系を必要とするのだから。同じことが小言明単位$(8)_4$についても言える。ようやく$(11)_4$以降、古典超越的な小言明単位がまとまったグループになる。そのさい、われわれは、最後の小言明単位$(15)_4$がすでに四値的論理学の適用対象であることを確認するのである。

このように、古典的な論理学は、小言明単位という観点からすれば不

完全なのだ！それは、もっと豊かな構造連関の一部でしかない。古典超越的な論理学は、普遍的な構造連関の理論である。そこでは、古典的論理学は――基本的な二値編成だけを取り上げて記述するかぎり――特殊ケースとみなされる。ギリシャにおける伝統的論理学の創造者たちにとって、意識のなかで仕上げられた理論的思考としての論理学の構造論は、およそ存在（ザイン）なるものの存在論（オントロギー）的構造と表裏一体を成しているのである。この素朴な表裏一体性信仰はすでに動揺を免れず、論理学自体においても軽視されるばかりでなく、遂には当初の存在論問題が消滅するに至っている。古典的な立場はこうであった。……およそ存在するものとしての世界は単値的であり、そうである以上、思考における世界の像は必然的に二値的［存在するか否か］である、と。これに対して、いまでは、古典的論理学の小言明単位の不完全性のゆえに、以下のことが確認されている。なるほど、われわれの理論的思考はいまなお二値的であり、（思考する主体の空間が内容的には［真か偽か、美か醜か、合法か違法か、といった］基本的二値編成を示すという事実に基づいて）二値的であり続けるであろう。しかし、そのような意識が根ざす世界自体は、測り知れないほど複雑な二値編成複合（フエアブント-コンテクストウーア）を存在論的に示すものである、と。

そこから、独特のパラドクスが生まれる。確かに人間の思考は二値的であり、再び強調しておきたいが未来もそうであり続けるであろう。しかし、こうした意識が理論的に捉えようと試みる世界の方は、存在論的に多値的なのである。だから、古典超越的な論理学は、二値的論理学によって多値性を考えるという、まずは矛盾しているように見える課題に直面する。

だがこの課題は、多値性の体系が古典的な論理学の枠値体系（シュテレンヴェーアトジュステーム）［pK1<—>2q、pK2<—>3q、pK1<—>3q といった二値性の複数存在、すなわち二値編成複合］に他ならないことをわれわれがすでに確認したかぎりで、一見してそう思えるほど解決困難なものではない。われわれは世界の本質について熟考するさいに、いつも現実全体の一片しか捉えていないことを批判的な自照によって意識しているのだ。しかし、きびしく理論的・形式的に考えるということは、全現実の一片を一

つの基本的二値編成と見られるように選びうる、ということを意味する。ところが古典的理論は、素朴にも、この基本的二値編成を――有限の人間意識に実際上その力がなくてさえ――飛躍なしに、原理的に世界全体に拡張しうるものと考えた。古典超越的な理論はこのテーゼを争うものである。それは、現実の全体は統一的な基本的二値編成として理解することができず、互いに補足し合い浸透し合うさまざまの基本的二値編成がもっと高次の構造的なまとまりを成したものだ、とする。これを、われわれは、二値編成複合と名付けたのである。世界は限りなく多数の存在論的な［二値編成の］場である。そして、それぞれの場が切り離して観察されるならば、世界はいずれの場においても二値的システムとして示されうる。しかし、それらの場の共存は、一箇の多値的体系によってのみ示されうるのである……われわれがそもそも値（あたい）［二値的か多値的か］によって論じようとする限り。

実際、古典超越的な理論を多値性問題と直結させるのは、古典超越的な形式主義の表面に触れることにしかならない。われわれはすでに、真についての機能子をさまざまの小言明単位に帰せしめることによって、値（あたい）の織物の「下に」ある深部の構造に行き当たった。その構造はさまざまの値によって占められはするが、それらの値とは関係なしにさまざまの形式的構造法則を提供するものである。われわれは上記の小言明単位表において四枠の小言明単位のみを示したが、同一の原理によって任意の長さの小言明単位を作ることができるのであり、それらすべてが古典超越的な構造論において正確に論理的な意味をもつことを示しうるのである。それについては、三つのケースがありうる。第一に、どんな値によって占められるかを全く問わずに小言明単位論（モルフォグラム）を展開することができる。第二に、小言明単位がつねに何らかの値によって占められるものと定めることができる。第三に、いくつかの小言明単位の表現は値によって占められるが占められないものもあると考えることも許される。こういう理由で、この論考の表題では、「多値的」というように括弧をつけたのである。古典超越的な論理学そのものを多値性の問題と直結させることは、誤解を生む。それに、多値性という用語は二義的である。なぜ

なら、われわれは、一方における二値編成内部の意味での［確率の差異、様相の差異による相対的な］多値性、他方における二値編成複合の多値性を、区別しなければならないのだ。

エピローグ

以上において、古典超越的な思考が形而上学的な此岸概念を解消したこと、プラトン的な理念の楽園もキリスト教的な神の天国も消滅させたことにまで説き及んだが、それは、プラトンやキリスト教信仰がこれらの地を充たした実質的内容や構造的問題が、いまや消滅し、失われてしまったということでは決してない。まさにその正反対なのである。この主題が扱われる領域は、世俗化された形で存続する。違いが生じたのは、すでに思想家としての教父たちや新プラトン主義に影響を与え、それを経由してスコラ学に伝えられた宗教的・哲学的な問題がいまやわれわれの物理的此岸世界の分析に移った、という点だけである。ここでしばしば問題とされたのは、神聖な起源のことなどもはや判らなくなっているさまざまの定式であった。いくつかの世界的な大宗教でも、プラトンにおいても質料（マテーリエ）の問題が適切に処理されていないことは否定できない。質料は、いかなる像も輝くことのできない無であり、闇である。それを少しでも積極的なニュアンスをもつものとして捉えるときは、罪と誤りの源である、とされる。これが存在論による思考の誤導のせいだということは、ヨハネス・ダマスケーヌス［Johannes Damascenus,676-749: ダマスクスのヨハネス］が、聖画像破壊論争（イコノクラスムス）において聖画像の破棄に反対する激しい論陣を張り、それ［聖画像の破棄］は「神のロゴスがやはり対象としながら自己と同一化した質料（マテーリエ）を軽視するものだ」としたときに、おそらくすでに感じ取っていたのである（Adolf von Harnack, Dogmengeschichte Ⅱ, S.484, Tübingen 1931）。聖画像において、此岸と彼岸の対立は止揚されている。［このように考える］ヨハネス・ダマスケーヌスにおいて東方と西方の両キリスト教界（クリステンハイト）が分離されることになったのは、偶然ではない。分離の原因は質料の問題にあった。なぜなら、聖画像論争の基礎にあったのは、質料をどう理解するかについての根本的に

異なる二つの見解だったからである。一方では、思考はアリストテレスの質料概念、すなわち形態もなければ自照もなく、高所から降ってくる形相（フォルム）ないしはたらき（ノエシス）を待つばかりの質料（ヒュレー）という概念によって、支配される。キリスト教神学においてこの質料は罪深さの極みになったのであるが、まさにこの時期に、「……罪だけが聖画像をもたない」（[アンティオキアに近い] キュロスのテオドレート [Theodoret, 393-460]）という意味深長な言葉を得た質料（マテーリエ）概念が、初めて世界史的規模の大きな歴史的分裂をもたらしたことは、特筆に値する。みずからは聖画像たりえず、それゆえ地上のものならぬ彼岸という対極の観念を内在させざるをえない基体（ズブストラート）として抱かれるこの [テオドレートの、アリストテレスとは反対方向に一歩踏み出した] 質料（マテーリエ）概念に、いまやヨハネス・ダマスケーヌスやテオドールス・ストゥディタ [Theodorus Studita, 758-826：コンスタンティノポリスのストゥディオス修道院のテオドロス] のような思索者によって、[さらに一歩を踏み出した] 第二の質料（マテーリエ）概念が対置される。ここでは、質料はみずからの原像であるとともに写像でもある、とされる。その帰結は、原像と写像は同一であるとするストゥディタによって導かれた。人は、真正なものと認められた聖画像という形で、実在のキリスト、実在のマリア、・・・実在の聖者たちに接するのだ、とされる（Harnack, a.a.O. S.478-490）。これによって明確ではないにせよ初めて、此岸がもはや〈地上を超えた彼岸〉を背景にして現れるのではない世界像、自己を支えて自己自身には備わっていない意義を与えてくれるものとしての此岸の世界像が、抱かれることになったのである。いまや、此岸すなわち結局のところ質料は、完全に自足的で自己の生存権を自分自身で生み出す自律的な国（ライヒ）として現れる。それは原像であると同時に写像なのだから。

ヨハネス・ダマスケーヌスと共に東方教会におけるキリスト教理の発展に――そして哲学の発展にも――一つの決着がついたというのは、歴史的な事実である。西方の神学者たちや哲学者たちは、それを、[東方の] 教会とそれに投入された知性に対して自分たちが唱えた異議の成果だと考えた。しかし、その判断は、これ以上ないほど間違っている。教理の発展が二値的なアリストテレス論理学に完全に依存している限り、単に

経験的な世界観によって提供されるよりももっと深いものを求める思考にとって、二つの世界［此岸と彼岸］という図式の枠内で動くほかはなかった。そうした思考の理論は、此岸を閉ざされた基本的二値編成として捉えることしかできなかった。そのような基本的二値編成に納まらないものはすべて、絶対的な超越性へと投射されざるをえなかった。

聖画像論争によって投じられた問題を克服するにはどうしても、われわれの現実は単一・二値編成（モノ・コンテクストウラリテート）を成しているという先入見を打破する古典超越的な論理学を必要とする。原像と写像の間には、千年の昔と全く同様にいまでも、二値編成の断絶がある。しかし、それを認める論理学は、紀元後8世紀の時点で展開されるに至らなかった。それを構築するには、まずは西方において古典的な二値論理学から導かれる存在論的な結論がすべて考え抜かれ、アリストテレスの思考体系が［ひとまず］完全に展開される必要があった。いまではそれが原則として成し遂げられており、存在論的思考が二値編成複合的（ポリユコンテクストウラール）な世界像を樹立するという理論的課題とようやく取り組めるようになっているのである。聖画像（イコン）という発想が単一・二値編成的（モノ・コンテクストウラール）な世界に占める場をもたないということは、もはや疑問の余地がない。単一・二値編成的な世界は、主観性（ズブイエクテイヴィテート）と精神（ガイスト）が此岸世界に根ざすものではないことを、前提とする。それらを排除してのみ、この客観的・物理的な宇宙は閉じられた二値編成として叙述されうるのだから。しかし、実在のキリスト、実在のマリア、実在の聖者たちが聖画像に姿を見せているとされるならば、（〈ヨハネによる福音書〉の言うように）自己を捉えることのできない闇を光が単に「上から」照らすのではなくて、何千年もの苦労によって光になるのは闇自身である［此岸自体が二値編成複合になり、〈主観性と精神〉を得てはじめて、彼岸への依存を脱却することが可能になる］。だが、闇である以上一つの形式しかもたない闇が単一・二値編成（モノ・コンテクストウーア）を示すのに対して、「光」の本質は複数の二値編成により破られていることにある。聖画像崇拝と結びついた「キリスト」とか「マリア」とか「聖者たち」の名前と言葉はそれぞれに完結した二値編成を示しており、アリストテレスの質料（ヒユレー）の単一・二値編成（モノ・コンテクストウラリテート）を二値編成複合的（ポリユコンテクストウラール）な質料（マテーリエ）概念に移行させるものなのだ。

そして、最後に繰り返しておきたいが、この概念を分析できるのは、多値性をも認める古典超越的な論理学だけなのだ。

【注】

1）Gotthard Günther, Die Theorie der „mehrwertigen“ Logik. 初出は R. Berlinger und E. Fink (Hrsg.), Philosophische Perspektiven Bd. 3, 1971, 110-131. 本訳稿は、Die komplette Bibliographie Gotthard Günthers <http://www.vordenker.de/ggphilosophy/gg_bibliographie.htm> 所収のヴァージョンによる。なお、邦訳について Günther の遺稿を管理する Prof. von Goldammer の許諾を得た。

2）独文底本（脚注 1 参照）では、最上欄の pK2<—>3q と pK1<—>3q が逆になっているので入れ替えた。

（むらかみ　じゅんいち・桐蔭横浜大学終身教授）